令和５年度第２回すみだタウンミーティング　議事録（要約）

■区長挨拶

区長になって 9 年目だが、区民の皆さんからの声を伺って、区政に反映できるタウンミーティングはずっと続けていきたい。そして、私は気軽に話して皆さんの困りごとや相談にも乗りたいなと思っている大人の 1 人である。ここに集まった皆さんとはもう仲間ということで、ぜひ遠慮なくお声がけをいただけたらありがたい。

墨田区は 3 月に人口 28 万人を突破したが、特に 20 代、今日参加の年代の方が増えている傾向にある。皆さん普段はあまり意見を言わない世代の人かもしれないが、その年代の代表として、今日はいろいろなお話をいただけたらありがたいなと思っている。

それから、多くの方に事前ワークショップに参加いただき、いろいろな意見交換ができてよかったと言っていただいている方、気合いを込めて今日はプレゼンテーションするという方もいるということで、本当に私も楽しみにしていた。ぜひ率直な皆さんのお声を伝えていただき、柔軟で自由な若者の発想をご提案いただけたらありがたい。

■A グループの発表

A グループ：「再開発をやめましょう」という提案をする。

再開発と聞くと、下町ではなくなってしまう、緑も減って人工的なものになってしまう、個人商店の経営が難しくなるなどの課題が思い浮かぶ。「再」という言葉から連想される、自分たちが作ってきたものがいけなかったのではないかというイメージを払拭したくて「新開発」という言葉をつくった。今までよかったものはより良く、今までイマイチだったところは少しでもよくできる新しい試みをしていこうという思いを込めて「新開発」を使っていければいい。「新開発」をする中でも、町の人が主体になって一緒に考えていくことを重要視していきたい。僕たちみたいな、今後墨田区に住むであろう人々の意見も、より聞いていただけると嬉しい。

最後に、再開発をするなら、そのためのタウンミーティングをするといいのではないかと思う。

区長：

再開発という言葉は行政用語だが、今発表いただいたような意味は大事だと思う。用地買収で出ていけと言われた、といったイメージではなく、新開発というイメージでまちが変わっていく方が嬉しい。この提案が若者から出てくることが驚きで、若者世代が好むものと逆をいった点で、みなさん墨田区ファンなのだなという感じがした。

京島辺りに見られるような、墨田の良さを残した方がいいという提案だと思うが、同感である。区内のそれぞれの町に特徴があって、不易流行というものがある。流行もどちらも捉えて区政運営をしていく必要がある。

若者ならではの「新開発」という意味合い、街を思い切って変えるだけでなく、慎重に丁寧に、墨田区の良さを残していくまちづくりという点で、大いに参考にさせていただく。

A グループ：

再開発ともう一つ、防災の話もあった。木造建築の耐震構造など、法律上は仕方がないとし

ても、やっぱり下町の雰囲気は残していきたいという意見も出ていた。

区長：
　墨田区の課題として、木造密集家屋等の防災上の話はある。ただ、耐震化、耐火構造などで現在の建築技術も進化しているので、単にコンクリートにしていくのではなく、そういった手法を研究し、改修していくという考えは持っていないといけないと思う。

■B グループの発表
B グループ：「学生や若者などが活躍しやすくなる支援制度」を提案する。具体的には、団体設立と活動支援の２点。
　まず団体設立は、団体と団体をつなげる団体が今ない。このタウンミーティングを通して様々な意見を聞いて、自分の所属する団体においても参考になる意見だと感じたので、交流会のようなものができるといい。交流会を開くための団体を設立したいと思った。
　次に活動支援は、現在の墨田で活動していると、区内の人が活動する上では支援が整っているが、区内在住、在学、在勤でない人にはあまり活用できない。区外の人にも、区内で活動している人に対するサポート制度がほしい。それがあれば、墨田区内で活動しやすくなり、活動する人が定着し、継続性も生まれてくると思う。
　墨田で多くの若者が活動できるようなサポート制度を作っていただけたらと思う。

区長：
　団体を設立する環境づくり、墨田区内外にとらわれない活動の支援、すごくいいご指摘だと思う。例えば墨田区として予算を立て、執行していくと、行政には結構縛りがあるため、その中で物事を進めていかなければならない。団体の設立にしても、社会貢献をしてもらえる団体や、子どもにまつわるテーマの団体などを期待されてしまうところから、団体設立のハードルが少し高い。だが、起業や団体設立をしないと何もできないかというとそうではないので、皆さんからいろいろなお話を伺うことで団体設立のきっかけをつくることが大事なのだと思う。つながる、コラボするところまでいけばいいが、まずは意見交換をして自分たちでこんなことをやってみたい、延いてはこういう団体を設立できたら、その段階としていい提案だと思った。
　区外の方に対して、私は一切ボーダーを引いていない。だからといって、区の税金を区外の人に積極的に使うことも出来にくい。墨田区の PR をするとシティプロモーションにつながり、それが区外の方にも伝わっていくので、情報発信を続けていくことが大切だと思う。９年前に区長になった際、墨田区の人にとっては「人つながる墨田区」の下町人情を生かして、しっかり自分の郷土意識、墨田区愛をいっぱい醸成していこうと思ったが、他区の人に対しても実はメッセージがあり、その方たちには墨田区に対して憧れと共感を持っていただけたらありがたいという思いで、「人つながる墨田区」をテーマに発信したことがある。
　区外の方であったとしても、墨田区内で活動する方をサポートできる体制や活動に参加しやすい環境を整えること、区外の方も迎え入れて、そこからの意見を取り入れ、そして団体設立までサポートしてほしいという意見、若者ならではの率直なものだと感じた。具体的にどのような形にすればいいかは、ぜひ議論したいと思う。

Bグループ：

私自身もたまたま区で活動している人間だが、墨田で温かい人、いい人達に出会い、活動しやすい場所だと感じているので、もっといろいろな学生にも墨田で活動してほしい。タウンミーティングで出会った人とも何かできたらいいし、多くの学生と今後も墨田で様々な活動をやっていけたらと思う。

区長：

23 区で大学がない区が墨田区だけだったが、４年前に iU（情報経営イノベーション専門職大学）ができて、その次に千葉大学が揃った。大学の進出については後発の区なので、どこの区よりも、大学生と一緒に地域の課題解決を目指すなど、楽しくやらせてもらっているという自負がある。大学誘致の際、学ぶフィールドとして思う存分墨田区を使ってくださいと言って墨田に来ていただいた経緯があるので、まさに今仰っていただいたことは続けていきたい。

■Cグループの発表

Cグループ：「もっと使いやすいすみまるくん」について提案する。

小学校６年間すみまるくんを使って通学していたが、一方通行なので不便を感じていた。事前ワークショップの中でも、ルートが固定化されすぎていること、道路が狭い町には運行しないこと、逆ルートがないことなど、使いづらいという意見が出ていた。その問題を解決する二つの案を提案する。

①AI を利用したバス

複数の利用者が設定したルートを AI が自動で計算して、最適ルートを走るというもの。

②グリーンスローモビリティの導入

グリーンスローモビリティは、時速 20 キロ未満で公道を走ることができる電動車を使うので、道が狭くても運行しやすい。また普通免許だけで運行できて、速度も遅いので高齢者の方でも運転しやすい。今挙げたすみまるくんルートについての意見のほかに、地元民や他の地域の人、高齢者、若者間の交流ができないのかという意見もあったが、例えば地元民向けのルート設定をしたものの他に、京島地区や向島の花街など観光客も利用できるルートを設定することで、様々な目的の人が乗り合わせることになり、車内での交流が期待される。ぜひ実現してもらいたいと考えている。

区長：

区としても課題と思っている区内コミュニティバスの運行について、これも鋭いご指摘だった。スカイツリーが開業した年に、このバスが観光の視点を取り入れた区民の足として、一方通行で 3 ルートできた。予算上でいうと約２億円を用意して区民の利便性を向上させるという取組だった。双方向のルートという課題はあるが、都バスなど民業を圧迫しないバスルートをつくって区民に利用してもらうという制限がかかる取組になっている。常に課題であると思っているので、ルートの変更等はしっかり考えていきたいが、どうしても限界があるものでもある。2024 年問題、バスや物流ドライバーの働き方改革によって、バスの運行時間はさらに制限され、人手不足という問題にも直面してくるので、今後も区民に使っていただけるように、バスルートをしっかり考えていく必要がある。

続いてグリーンスローモビリティについて、観光面、利便性、区民の足として、どのように活用できるか。ライドシェアの話もあり、様々な実験もされているが、これからの課題として研究していきたいと思う。率直な利用者目線の声とそれに代わる提案ということで非常に参考になった。

■D グループの発表
D グループ：「この先 50 年、タウンミーティングを継続していく」という提案をする。

タウンミーティングを提案したい理由は二つあり、一つは区長に言いやすいから。区長に直接意見を言える機会はなかなかないので、ぜひ続けていきたいなと思う。もう一つは、時代は移り変わるから。先ほどの区長の発言のように、不易流行も大切にしながら、これから 50 年続けていけたらと思う。現状のタウンミーティングは、リピーターの方が多かったり、そもそもタウンミーティングをやっていることを知らない人がいたり、という状態だと思う。まだタウンミーティングの魅力に気づけてない人を取り込むために二つの提案をしたい。

①申込みしやすくするためのイベントページ LP（ランディングページ＝ウェブ上で訪問者が最初にアクセスするページ）を作る

墨田区のホームページの中にあるタウンミーティングのページは硬いのではないか。そのイメージを払拭するために、イベントページを作るのもいいのではないかと思った。

②前回のタウンミーティングの様子をインスタグラムに上げる。

たくさんのフォロワーがいるし、前回の様子が見られると安心するので、次のタウンミーティングに参加したいと思ってくれる人が増えるのではないか。

最後に、参加者の中からタウンミーティングの実行委員会を作って、50 年続けられる仕組みづくりも必要だと思う。ここに集まっている人は墨田区大好きな人が多いと思う。ここで出たアイディアを小学校や児童館などに発信していき、小さい子も含めて様々な世代が参加できるようなタウンミーティングにしていけたらいいなと思う。

区長：

タウンミーティングの良さ、大事さをすごく理解して、その良さをみんなに伝える工夫を提案いただけた。非常にわかりやすい、いい提案。次に区長になる人にも、この伝統、この雰囲気を伝承していってほしいと率直に感じた。墨田愛を感じ、こちらもモチベーションが上がり、改めて大切さを感じた。

実行委員制、インスタグラムなどの具体的な提案もあった。こども家庭庁が出来て、「こども基本法」「こどもまんなか社会」が提唱されているが、私も子どもの声を聞きたいと思っている。子どもの声を聞きつつ、区政を運営していく、まさに法改正の趣旨なので、次のタウンミーティングでやらせていただきたいと宣言しておく。もう一点、子どもの声を聞く上では、年代の近い、今日いるような若い世代のみなさんが少しでも参画してくれたら、より良いものになりそうな予感がした。

D グループ：

たくさんいいアイディアはあるが、50 年続けるためには、続ける仕組みづくりが大事だと思う。実行委員会制はすぐやれることかなと思うので、ぜひ、次のタウンミーティングでやっていただけたら嬉しい。

■E グループの発表
E グループ：「お金のかからないフリースペース」を提案する。
　押上や曳舟エリアに、低予算で利用できる若者中心のフリースペース、コワーキングスペースを提案したい。イメージとしては、墨田区にある「もちこみ屋（近隣商店街の惣菜店等で購入したものを持ち込みできる飲食店）」と「SIC（墨田区産業共創施設　SUMIDA INNOVATION CORE＝スタートアップ支援を通して区内産業の活性化を図り、新産業を創出するための施設）」が掛け合わさったもの。主な対象とするのは、墨田区在住、さらには区外から入ってくる方。特に区外から入ってくる関係人口について考えており、関係人口の動きも含めて経済を良くしていきたい。「もちこみ屋」のように食べ物を食べる交流部分と、「SIC」のコワーキングの仕事的な部分を掛け合わせていけたら。主に経済力がない学生や若者が静かに学習できるようなスペースを作り、さらに交流のためのスペースも作る。周辺の地域の方が入ってくることで、より経済が活発化するのではないか。経済効果としては、商店街を利用することで、墨田でお金をたくさん使ってくれる。商店街とコワーキングスペースの連携によって、例えば商店街で使える無料チケットを配布するといったことなどを実現できるといいのではないか。

区長：
　「もちこみ屋」をよく知っているなと驚いたが、提案いただいたイメージは大事だと思った。
　区役所の標準装備として様々な公的施設があるが、予約して借りるとお金がかかる場合もある。そこが若者の悩みの種のところもあるので、率直な提案として、区はどのように対応していくかもテーマとして取り上げていきたい。関係人口アップは区のテーマとして持っているので、なんとか関係人口の一人になってもらって、今後参画してもらったり、区内に住んでもらったり、というところまでつなげていけるといいと思う。無料がいいかどうかは課題やご意見等あると思うが、公共施設をオープンにしてみんなに集まってもらうという方法もあり得ると思った。

E グループ：
　「もちこみ屋」は、キラキラ橘商店街からいろいろなものを買って持ち込んでいるが、周辺地域の人の憩いの場になっていてすごいと思っている。一方で、すでにコミュニティーが出来上がっていて、若者が入りづらい雰囲気もある。若者向けに新しく施設をつくっていただけたら、商店街との繋がりもでき、墨田区への愛着も沸いて、住み続けてくれるようになるのではないかと思い提案した。

■F グループの発表
F グループ：「空き家を使った多世代交流」について提案する。
　事前ワークショップで、空き家を使って多世代交流できる場をつくりたいという意見が出ていたが、そこから生まれたのが「すみだのおうち」。多世代のつながりの場を形成するために作りたい。放課後、家に帰っても親がいなくて一人で過ごしている小学生や、不登校の子、さらには日中なんとなく家にいるようなお年寄りなどが気軽に来て、家のような感覚で多世代の人が繋がれる場所として活用できたら。少子高齢化によって一人で過ごすお年寄りが増えてい

るが、みんなで集まって話をすることが生きがいになったりもする。また、世代間交流が少なくなってきていると思うが、小学生と高齢者が関わるきっかけにもなる。不登校で学校には行きたくないが、家から一歩出てみようとなった子にとっては、ふらっと立ち寄れる場所があると、その子にとっての居場所になる。そこを利用した人達がそこに返したいという気持ちになって手伝いなどをするようになったら、墨田区が今よりもっと明るいまちになると考えた。
区長：キーワードが詰まっていた。まずは空き家の利活用について。墨田区に関わらずいろいろな地域で空き家が発生しているという社会問題があり、行政としての課題でもある。どういう風に活用するのかということだが、空き家は所有者の財産なので、予算で買い取るのか等の課題はあるが、空き家に目をつけたことが大事なキーワードの一つ。

多世代の交流の場、つながりの場というのは、墨田区らしくて大事な提案だと思う。最近墨田区は「DX アワード（Tokyo 区市町村 DX award 2023）」の表彰を受けた。大学生が老人クラブや町会に出向いてスマートフォンの使い方を教えてあげるもので、優秀賞に選ばれた。大学生にとっては多世代との交流であり、高齢者にとってはスマートフォンの使い方を教われるという点で、ウィン×ウィンの関係を創り上げるところで評価されたのだと思う。

下町墨田の良さを体感できたり、具現化できたりする「すみだのおうち」構想もとてもいい提案だと思う。理想を言えば、例えば不登校の子がふらっと立ち寄った時に、やさしい人達と会話ができて良かったなという気持ちになって、学校に通えるようになる、というところまで叶えば。空き家をどう活用していくか、おうち化して誰が運用していくかなど具体的な課題はあるが、非常に真髄を突いていた。

F グループ：

私は墨田区が好きなので、みんなが住みやすくなったらもっと嬉しい。

■G グループの発表

G グループ：「町工場を消したくない」という思いから、町工場を知ってもらうための提案をする。

私たちのグループは全員区外から来ているが、そんな私たちから見て墨田の特徴というと「町工場」がある。「継創（つぎづくり）フェス in SUMIDA」に参加し、いろいろな経営者の方、町工場の方とお話しする機会があったが、後継者がいないという話を聞いた。そこで「町工場を知ってもらう」ための提案をする。町工場は人事がいないのではないかと考えていて、町工場の勤め方等、情報発信が足りていないのではないかと思うので、人事サイトを作るのがいいのではないかと。ただ、町工場は少人数のところが多く、一人に対する責任が重いので、サイトを見て来た見知らぬ人が勤めるような形になってしまうのは不安があると思う。例えば、中高大学生向けにインターンをしてもらったり、部活動などと組んで町工場の方と交流したりすれば、若者に町工場を知ってもらえるのではないか。学生と町工場と人が集まる場所を作っていければ。

人をつなげることで必然的に実現可能ではあるが、文化の継承にも引き続き取り組んでもらいたい。継承する側も、墨田区の文化や技術がきちんとわかるように、情報として開示していただけたらと思う。

最後に、町工場は経営と技術力両方が必要なので、経営側は町工場法人連合のようなものを

作って、ある程度まとめてもいいのかもしれない。

区長：
　墨田区の特長の一つの町工場、ものづくりについてしっかりと掘り下げて、いいご提案をいただいた。ものづくりの区として、最盛期は 9,700 程事業所があったが、今は 2,000 ほど。ただ、今も 2,000 ほどの工場があるということは、現代社会においても産業集積が保たれているという捉え方もできる。その良さをしっかりと継承し、区民にももっと共有し、区外から来た人にもものづくりの技術や製品の良さをもっと知ってもらうようにしたらどうかということで、大事なテーマだと思う。
　コロナで休止していたが、再開したらぜひスミファに行ってほしい。多くの町工場が工場見学をオープンにやるもので、ものづくりの良さを感じられる取組をやっているので、再開後、皆さんも来てもらって、目で見てもらうことが大事だなと思う。そこからまたヒントが生まれる気がする。
　最後にあったお話で、すでに濱野製作所というリーダーがハブとなって、うまく繋がっている現状がある。また、フロンティアすみだ塾といって、若手の後継者が切磋琢磨して仕事を継いでいくという経営者塾があって、そこの出身者が約 200 人になった。そういう人達が墨田区を支えてくれているという現状もある。つなぐ役目を果たすのは区役所の役割でもあるが、法人連合体というのはいいアイディアで、いいところをついていると思う。
　文化の継承についても、我々も非常に重視している。最近では盆踊りが復活してから人が集まるようになったが、大相撲や花火大会など、江戸時代からの文化も息づいているという点で、ものづくりや町工場も同様に継承していったらというのも全くその通り。いいところをうまく拾い上げてくれた。

G グループ：
　私自身町工場と協力してものづくりをしているが、突然そこら辺にいたおじさんが物の作り方を教えてくれたりする。そういった開けたまちというものを今後も残していけたらと思う。

区長：
　墨田の町工場は、実はそういう最高の技術を持った人達の集まりである。「OriHime（オリヒメ）」というロボットは、遠隔操作でコーヒーの注文を受けることなどができ、障がい者の方などが働ける。そのロボットを作っているのも墨田区である。WIHLL（ウィル）という会社が障がい者の方の移動手段として電動車椅子を展開しているが、それを作ったのも墨田区。それから、スタートアップ企業で、ストリーモという会社。電動三輪車だが、工場内の移動手段として、従業員が広い工場の中でも移動できるものを墨田区で作っている。墨田区には、社会課題の解決や困っている人を助けるという技術を持っている人がいるので、将来、未来の仕事にも繋がるといいなと思う。

■区長総括
　みんなが前へ出て発表している姿、具体的な提案を聞けて非常に参考になった。今日の内容を記録しているので、それを反映できるように努力していきたい。引き続き墨田区ファンとし

て、みなさんにはこの思いを継続してほしい。そして引き続きこういう思いを私に伝えてほしい。

みなさんには、これから先の人生、将来設計、いろいろあると思うが、積極的に意見を言うことができたとか、自分の考えを区長に伝えることができたという自己有用感というか、この成功体験をどんどん積み重ねていってほしい。人の話をよく聞いて、相手の考えを踏まえて自分の意見を発信したり、人に伝えたりしていく。また、参画していく時には足を使って積極的に飛び込んでいくことを続けていただけたら。そういう経験の積み重ねが、自分の人生や将来をいい方向にしていくと思う。皆さんにはそれが大事だし、それができる人達だと感じたので、それぞれの立場で頑張ってほしいとエールを送りたい。

あまりにも全部いい提案だったので力が入りすぎてしまったが、今後タウンミーティングの実行委員などになっていただき、ぜひまた直接伝えてほしい。本当にどうもありがとうございました。